

脂質生化学研究

脂質生化学研究 Circular

1989

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

平成元年度会費払い込みのお願い

- 平成元年度会費 3,000 円を、3 月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。
- 振替用紙は 1 人 1 枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口に備えつけの用紙をご利用ください。振替の送料は事務局負担ですので赤い振替用紙です。
会費送付先 振替番号 東京 4-91400 日本脂質生化学研究会
- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金 2,000 円 + 平成元年度会費 3,000 円 = 合計 5,000 円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
(事務整理の都合上、2 年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり、或は他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。
- 所属の変更、あるいは外国長期出張の際は必ずご連絡ください。

事務局 (〒173) 東京都板橋区加賀 2-11-1 帝京大学医学部第一生化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局 TEL (03) 964-1211
(内線) 2225, 2226

.....貴方の会費で運営されています

今日、お払い込みください.....

第31回研究集会発表演題の募集

① 演題の申し込み

発表15分討論5分を予定して居りますが、演題数によっては発表13分討論5分になる場合もあります。

申し込みには挿み込みの原稿用紙をお使いください。これは、このまま印刷になるものではありませんから、タイプでもワープロでも手書きでも結構ですが、黒で読み易く書いてください。

申し込み締切 5月8日(月)必着

② 審査ならびにプログラム編成

在京幹事、実行委員を中心に審査ならびにプログラム編成をおこない(5月9日(火)予定)、改めて、講演集用原稿用紙をお送りいたします(5月11日予定)。

③ 講演集用原稿締切 6月1日(木)必着

[申し込み、および講演集原稿送付先]

〒173 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部第一生化学教室内

日本脂質生化学研究会事務局 宛

第31回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ

○ 会 場 : 神戸学院大学(9号館)

〒673 神戸市西区伊川谷町有瀬518

TEL 078-974-1551(代)

○ 期 日 : 1989年7月22日(土)-23日(日)

○ 実行委員 : 藤野 安彦 教授

〒675-01 加古川市平岡町新在家

兵庫女子短期大学 食物栄養学科

TEL 0794-24-0052(内線235)

○ 集会参加費 : 3,000円

○ 懇 親 会 : 1989年7月22日(土) 夕刻

神戸学院大学9号館内食堂 会費 5,000円

以上

平成元年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を平成元年 7 月 22 日（土）、懇親会に先だって、懇親会場に於て開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 山 川 民 夫

- 議 題
1. 昭和 63 年度事業報告
 1. 昭和 63 年度決算報告ならびに監査報告
 1. 平成元年度事業計画ならびに予算案

以 上

平成元年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を平成元年 7 月 22 日（土）正午（プログラム編成上、若干の変異があるかもしれませんが）より神戸学院大学内で開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

- 議 題
1. 昭和 63 年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
 1. そ の 他

- 幹事の皆様には別途、ご案内を申し上げます。
- 尚、昼食代 1,000 円を申し受けます。

大野公吉先生を偲ぶ

秋 野 豊 明 (札幌医大・第一生化)

本研究会名誉会員の大野公吉先生（前札幌医大第一生化学教授）は、昨年10月2日直腸癌のため逝去されました。71才の御生涯でした。編集幹事のおすすめがありましたので、会報に大野先生を偲ぶ文を寄せたいと思います。

先生は北大医学部を卒業後、理学部で2年間有機化学を学び、昭和17年に北大医学部医化学教室安田守雄教授の下で助手になられ、リン脂質研究の分野に入られました。戦中及び戦後の極度に物質が不足していた頃、貴重な有機溶媒を集められて、ウシ脳脂質分画の仕事をされました。この間の四酢酸鉛を合成して行ったスフィンゴシン構造決定の研究（1944年）は、米国のH. E. Carter 教授とは全く独立に正しい構造を提唱したことで現在評価されております。この事実は戦時中の状況から、当時は国際的に認知されるに至りませんでした。戦後山川民夫先生、野島庄七先生によって広く国内外へ紹介され評価を得るに至っています。また戦中、脳にホスファチジルセリンの存在を証明され、PS→PE→PC のリン脂質生成機転を示唆されましたが、大野先生の提唱から10数年を経てこの機転は米国の研究者により証明されました。またこの時代に先生は栄養学の古典をよく勉強され、その基本的な考え方を習得されたようです。この考え方は、その後先生が札幌医大生化学教室を導く基本的理念となっていくと私は思っています。

昭和25年に33才で新設の札幌医大教授となり、以来32年間札幌医大における生化学の教育、研究、大学運営につくされました。昭和32年から2年間、前述した米国イリノイ大学Carter 教授の研究室へ留学、野島先生とは1年間同じ実験室で研究を共にされたと伺っています。帰国に際し大野先生は、米国で得た収入の殆んどを使って当時日本では高価なため入手困難であった貴重な試薬を大量購入して持参、帰国後の研究に備えられました。大野先生の札幌医大在職時代は、生化学研究の技術変革が急激に行われた時代でした。先生は進んで新しい技術を取り入れられ、しかもオーソドックスな手法で医学としてのリン脂質生化学の研究体制をもつ教室を作り上げられたと思います。この間、主たる研究テーマであった動物組織リン脂質代謝の研究に加えて、血清脂質、動脈硬化、老化、栄養など医科生化学領域において広汎な研究を行い、また量子力学について深く研鑽されたことはあまりに有名です。

舟橋三郎先生を悼む

原 一郎 (名誉会長)

先生は世事に疎く、学問にのめり込む昔風の学者タイプでしたが、非常に明朗で、活潑な議論を好まれましたので、若い人達に人望があり、教育者として非常に秀れた資質をもたれていたように思います。北大医学部時代の研究仲間からは藤野安彦先生、今井陽先生、坂上利夫先生などの俊英が輩出し、札幌医大での弟子からは、札幌医大・三成精先生（化学）、下条 貞先生（第一生化）、加納英雄先生（第二生化）、佐々木輝捷先生（がん研生化）、また岐阜大医学部の野間昭夫先生（臨床検査医学）、熊本大医学部の岡部紘明先生（臨床検査医学）など本研究会関係だけでも優秀かつ多彩な人材を育成されました。

昭和57年に御退官後は、北海道老年医学研究振興会研究所長として、老年医学研究の振興に当たってられました。大学の名誉教授室へは毎日顔を出されてJ. B. C. の最新号には必ず目を通し、若い人達にいろいろ教示されていました。2年前に突如として発病され、手術後の経過は順調でしたが、肝、肺への転移が発現してからは目に見えて状態は悪化されました。昨年9月肺サーファクタント・シンポジウムで滞在していたマールブルグ（西独）のホテルへ、教室の黒木君から深夜の電話があり、緊急入院されたことを知り急ぎ帰国しましたが、その後7日目に奥様、御長男（大野公一氏、東大教養化学助教授）はじめ御家族、加納先生、形浦先生（札幌医大耳鼻科教授、大野先生の最初の大学院生）それに私の見守るなかで静かに息を引きとられました。

札幌医大第一生化教室葬の葬儀には本学会会長山川民夫先生はじめ多くの会員の皆様から御弔意をいただきました。また野島先生には遠路おいでいただき弔辞をいただきました。本紙面を借りまして御礼申し上げます。故大野公吉先生には昭和63年10月2日付で正四位・勲三等旭日中授章を受勲されましたことをお知らせ申し上げます。

東大名誉教授、本会名誉会員 舟橋三郎先生が、1989年2月9日逝去されました。80才と承っております。先生は近年御体調がすぐれない為、本会の行事には御参加がありませんでしたので、余り良く御存じない会員もおられると思い先生の御紹介をいたします。

先生は1960年（昭35）、10月31日 本会が結成されました時の重要メンバーであられ、本会の事務の担当され、事務局が先生の教室（東大・農・農化・生物化学教室）に置かれました。

本会の発展に従い（1960年会員110名、1962年253名）事務量も増加し、秘書の方も手伝われるようになりました。

1967年国際生化学会が東京で開催され、先生はその財務を主管され1億円以上のお金を処理されました。

その後1968～69大学紛争が起り、その最中1969年に先生は東大を停年退職され、静岡の英和女子短大に移られ、10年間（1979年迄）単身赴任された訳です。御冗談とは思いますが、男の学校はもう沢山だと申された事を覚えております。誰しも大学紛争には苦労しましたから。静岡の温暖の地に女子大生を相手にされた10年間は先生にはそう御苦労のみではなかったように拝察します。家内には迷惑をかけていると何回か申されていましたが。

1971年、先生が静岡におられる機会を利用して、静岡薬大の松本教授と御一緒に第13回研究集会を主宰されました。先生の学校のすぐ近くの県立図書館で開催されましたが、いろいろと御骨折りであったと思っております。

1979年、先生は女子大を辞任され、東京にお帰りになり台所・調理台を先生の身長に合うように直され生活を楽しまれたように拝察しております。

1979年頃本会名誉会員に推薦されました。

先生はクラシック音楽を愛好され、またスキーにテニスにそして一高時代にはサッカーの選手として活躍されたようです。

昨日の御葬儀の折、御令息が親族として云うのは奇妙なんだがと前置きして先生の御人柄を述べられましたが、心やさしく、思いやりがあり謙虚であり、誠実でありそして忍耐強く、本当に良き知識人であられたと申されていましたが、正に至言で、欠点を見付け出す事が出来ない方でした。

先生のおかげで本会も足掛け30年を迎えようとしております。今後ますます本会が着実に前進して行く事を期待して哀悼の文といたします。

最後に、心から先生のご冥福を祈ります。

舟橋三郎先生の思い出

植 田 伸 夫 (帝京大医)

小生の預っている研究会の会計簿には昭和54年度からの会計監査報告が貼りつけられています。その頃、先生は静岡英和女子学院短大の教壇にお立ちになって居られたし、また弟子でもない小生は普段お目にかゝる機もなく、夏休みになると研究会の会計簿を抱えて、先生のご自宅に伺って監督を受けるのが常でした。

将に温容そのもの、会計の報告を1つ1つうなづいて、領収書の照合をしてくださいました。「では監査報告を書きましょう、その間レコードでも聞いていてください」。「えっ、これはことによると2A3のプッシュプル?」「やっぱり音はね、私は真空管の方が好きですよ。まだ予備の真空管を3本程持っていますけれど補給がつかなくなりましたね」。奥様の出してくださる冷たいものを頂きながらクラシックのレコードの真空管再生音を聞くのが、毎夏の小生のひそかな楽しみになっていました。お通夜の夜、白菊に埋った先生のお写真の裏から流れていたベートーベン、その真空管アンプの音であったのでしょうか。

以下は葬儀に参列された山川会長よりの聞き書きです。

会葬者に挨拶をされたご令兄のお話し、「三郎は神様の様な人でした。戦中、招集令状が来て入隊をしました。周囲の人達が、学者、研究者の力量を高く評価し、様々な手配をして、部隊編成の時、部隊長が“体の具合の悪い者が居たら一歩前へ出る”というから、その時一歩前へ出る、そうすると除隊になり研究室に戻るという筋書を作ってくれたそうです。その日、部隊長が筋書きどおり“一歩前へ”。しかし、彼は一歩前へ出なかったのです」。

葬儀の帰り道、原名誉会長と山川会長の会話「舟橋先生は神様だ。我々はさしづめ悪魔かな?」「いや悪魔という程ではないだろう」。

会の活動状況

① 第30回日本脂質生化学研究会・研究集会

第30回の研究集会に関しては実行委員長の和久教授の書かれたものがあるので、会としての記録も重複を避けて、和久教授の文章でかえさせて頂くことにする。(12頁参照)

和久教授、高野教授、皆様のご努力に謝意を表します。

② 第30回日本脂質生化学研究会総会

昭和63年6月30日(土)午後6時より学士会館で開催された。

総会の次第および議事内容は次の如くである。

- イ 挨拶 山川会長
- ロ 昭和62年度事業報告および決算の承認を求める件 植田幹事
63年2月に発行された脂質生化学研究サーキュラー(1988)に掲載された、62年度の事業報告につき承認を求め、野島会計監査より、決算の監査報告がなされ、拍手をもって承認された。
- ハ 昭和63年度事業計画および予算の承認を求める件 植田幹事
同じくサーキュラーに掲載された63年度の事業計画および予算案の承認を求め、拍手をもって承認された。
- ニ 昭和63年12月31日で任期満了になる役員的人事について 山川会長
幹事会で山川会長、植田庶務幹事、野島会計監査の再任を決めたことが報告され、承認された。また同じく、63年12月31日で任期満了する幹事の皆様には、会長より再任の要請があり、ご本人の承諾があれば、再任をお願いすることになった。また新たに、上田隆史、北 徹、加納英雄、三氏に新たに幹事をお願いすることが承認された。
- ホ その他、幹事会で討議された事項が報告された。
- ヘ 昭和64年度研究集会について 藤野幹事
昭和64年7月に神戸学院大学の校舎で開催する計画であり、会員諸兄の参加が要請された。

③ 昭和63年度第一回幹事会

昭和63年6月30日午後12時30分より、学士会館に於いて開催された。総会に報告し、承認を求める件等について審議した。

- 名誉会員、役員等の再任、新任について協議した。
- 64年度の研究集会開催について協議した。
- 65年度の研究集会実行委員を確認した。
- 学術会議議員の推薦結果について報告があった。
- 国際脂質生化学会議について報告があった。
- 臨床研シンポジウムについて報告があった。

以上、事務局で準備した議案が終了したあと、

- 林幹事（近大）より、脂質に関するデータベースを日本脂質生化学研究会を母体として脂質に関するデータベースを作っては如何かとの提案があり、研究会内に小委員会を設置して調査をすることにした。
- 山本（章）幹事より、実行委員の人選ともからんで、それらの決定は幹事会で十分に審議されるよう要望があり、この点は改めて幹事会の議題として討論することとなった。

④ 昭和63年度第二回幹事会

昭和63年12月12日、午後6時30分より赤門学士会館で開催した。昨年迄は在京幹事会として開催していたものであるが、本年の研究集会の機に山本幹事の発言内容を踏まえて、全国の全幹事に案内状を出した。議事内容は以下の如くである。

日本脂質生化学研究会昭和63年度第二回幹事会議事録

日時 昭和63年12月12日

場所 学士会館分館（赤門前）

出席者 山川民夫（会長）、原 一郎（名誉会長）、植田伸夫（庶務幹事）、

藤野安彦（第31回脂質生化学研究会—研究集会世話人）

荒木英爾、安藤 進、赤松 譲、石塚稲夫、伊藤俊洋、遠藤 章、

大橋昌子、大島美恵子、川口昭彦、小島英也、小峰仙一、渋谷 勲、

鈴木明身、永井克孝、西村顯治、原島圭二、飯田静夫、秦 霞哉、

松本 亮、村松敏夫、山下 哲、山田晃弘、山本 章、和久敬威、

島崎弘幸（事務局）以上29名。

議事内容

1. 昭和63年度事業報告および昭和64年度事業計画案について

植田庶務幹事よりの説明があった。

第30回研究集会での懇親会に、会費を支払って入場した者は128名であったと和久幹事より追加発言があった。

2. 第31回日本脂質生化学研究会研究集会について

藤野安彦幹事より案の説明があった。

提案どおり了承された。

3. 脂質データベース作成に関する調査活動について

植田庶務幹事より別記の説明があり、石塚幹事より補足説明があった。

これに対し、山田幹事より、データベースの作成には、それを作成するうえに、会員に大きな負担（労力等）がかかることになる。従ってデータベースの作成は脂質生化学研究会とはべつの組織で進めてほしい。との意見が述べられた。

多数の幹事より種々な意見が出されたが、永井幹事より、

〔1〕脂質生化学研究会の名前は貸すが、以降、研究会としては一切関知しない。

〔2〕データの集積、および以降の継続的なデータ集積に研究会として協力する。

〔3〕現時点は調査の段階であり、研究会として協力するかしないかは、もう少し調査の進んだ段階で判断する。

の3つの意見に“まとめ”の発言があり、本幹事会では、〔3〕、即ち、現時点は調査を行う段階であり、もう少し調査の進んだ段階で本研究会に報告してもらい、その報告をもとに研究会としての態度を決定する。また、その間に限り、研究会の名称を使用することを認める。ことについて了承した。

4. 昭和63年度決算の修正

前項の議論に関連して昭和63年度決算案、昭和64年度予算案について以下のように修正された。

63年度の脂質データベース作成に関する調査活動に関する調査費（旅費）について一部の支出を認めない、64年度に関しては調査費の計上を認めず、日本脂質生化学研究会がどのように対応するかは第31回研究集会の機に改めて審議する。

尚、本研究会の運営、実行委員の選出方法等に関する議論は時間がなく、先送りされた。

⑤ 昭和63年度事業報告(昭和63年1月1日～12月31日)

○ 会 員 正 会 員 896名(62年度893名)
 63年度新入会 58名
 “ 退 会 55名
 名誉会員 14名(大野公吉氏 昭和63年10月死去)
 (舟橋三郎氏 平成元年2月死去)

賛助会員 22社
 ○ 役 員 会 長 山 川 民 夫
 庶務幹事 植 田 伸 夫
 会計監査 野 島 庄 七
 幹 事 76名

○ 事 業 1. 第30回研究集会の開催
 63年6月30日(木)
 7月1日(金) 於 東京 学士会館本館
 実行委員 和 久 敬 蔵 氏(帝京大)
 参加人員 506名
 発表演題 一般演題 92題
 シンポジウム
 演 題 31題
 計 123題

2. 第30回記念講演会
 6月29日(水)
 Dr. F. Snyder
 Dr. R. W. Mahley
 世話人 和久, 高野 両氏

3. 脂質生化学研究30巻発行
 本文453頁

4. 脂質生化学circular 1988の発行
 本文 24頁

5. 脂質データベース作成に関する調査活動
 (別記)

6. 会議 総 会 6月30日
 幹事会 6月30日
 12月12日

⑥ 昭和64年度事業計画

○ 会 員 正 会 員 896名より微増の見込
 名誉会員 数野太郎, 木村雄吉, 永井諄爾, 山崎三省, 山添三郎,
 原 一郎, 高橋善弥太, 坂上利夫, 金田尚志, 今井 陽,
 堀 太郎, 野田万次郎, 松本 亮, 山川民夫
 以上14名

賛助会員 エーザイ株式会社 株式会社東京化学同人
 株式会社大阪細菌研究所 東京田辺製薬株式会社
 株式会社大塚製薬 株式会社東京プリント印刷
 小野薬品工業株式会社 東 ソ ー 株 式 会 社
 花 王 株 式 会 社 富山化学工業株式会社
 共立出版株式会社 三 共 株 式 会 社
 日本ルセル株式会社 塩野義製薬株式会社
 藤沢薬品工業株式会社 株 式 会 社 資 生 堂
 株式会社ヤクルト本社 住 友 製 薬 株 式 会 社
 山之内製薬株式会社 第一製薬株式会社
 雪印乳業株式会社 大日本製薬株式会社
 榊ジャパンバイオ研究所 (23社)

○ 役 員 会 長 山 川 民 夫 65年12月31日迄
 庶務幹事 植 田 伸 夫 “
 会計監査 野 島 庄 七 65年12月31日迄
 幹 事 (任期64年12月31日迄)
 猪飼 篤, 石塚稲夫, 鬼頭 誠, 小峰仙一, 矢野郁也,
 山本尚三, 伊藤精亮, 石橋輝雄, 池沢宏郎

(任期65年12月31日迄)

木村修一, 塚谷博明, 高野達哉, 二木鋭雄

(任期66年12月31日迄)

秋野豊明, 荒木英爾, 安藤 進, 板坂 修, 大橋昌子,
奥田拓道, 川口昭彦, 鈴木明身, 玉井洋一, 中野益男,
西村顕治, 野間昭夫, 水柿道直, 和久敬蔵, 赤沼安夫,
猪川嗣郎, 井上圭三, 遠藤 章, 奥山治美, 小野輝夫,
脊山洋右, 野沢義則, 武藤泰敏, 渋谷 勲, 松原淑子,
大島美恵子, 谷口直之, 岡本光弘, 伊藤俊洋

(任期67年12月31日迄)

赤松 穰, 植田伸夫, 小倉道雄, 香月裕彦, 日下喬史,
楠瀬正道, 児島英也, 斎藤国彦, 武内 望, 武富 保,
千田信和, 内藤周幸, 永井克孝, 野島庄七, 橋本 隆,
林 陽, 林 浩平, 原島圭二, 飯田静夫, 平山 修,
藤野安彦, 穂下剛彦, 牧田 章, 村松敏夫, 山下 哲,
山田晃弘, 山本 章, 藪内百治, 菅野道廣, 秦 霞哉,
三成 脩, 北 徹, 加納英雄, 上田隆史

- 事業
1. 第31回研究集会の開催
64年7月22日(土)
23日(日)
実行委員 藤野安彦氏(兵庫女子短大)
 2. 脂質生化学研究31巻の発行
 3. 脂質生化学研究circular 1989の発行
 4. 脂質データベース作成に関する調査
 5. 総会 7月22日
幹事会 7月22日, 12月 日

⑦ 昭和63年度収支決算および平成元年度収支予算表

収入の部	63 年 度		平成元年度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	2,112,000	2,023,000	2,100,000
入 会 金	100,000	116,000	100,000
賛 助 会 員 会 費	440,000	400,000	440,000
講 演 集 売 上 げ	110,000	204,000	150,000
広 告 収 入	800,000	900,000	800,000
利 子	500	163	200
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	30,404	0
小 計	3,562,500	3,673,567	3,590,200
前年度よりの繰越金	1,080,230	1,080,230	1,613,673
計	4,642,730	4,753,797	5,203,873

支出の部	63 年 度		平成元年度
	予 算	決 算	予 算
研 究 集 会 補 助	500,000	500,000	500,000
会 報 製 作 費	250,000	245,150	260,000
講 演 集 製 作 費	1,600,000	1,526,010	1,650,000
旅 費	20,000	41,000	100,000
郵 送 料 ・ 通 信 費	500,000	398,510	500,000
会 費 収 納 経 費	35,200	31,500	35,000
事 務 用 品 費	50,000	21,060	50,000
会 合 費	150,000	92,144	120,000
謝 金	100,000	20,000	60,000
総 会 経 費	20,000	5,000	5,000
事 務 経 費	200,000	200,000	200,000
調 査 員	0	50,350	0
雑 費	10,000	9,400	10,000
小 計	3,432,200	3,140,124	3,490,000
次年度への繰越金	1,207,530	1,613,673	1,713,873
計	4,642,730	4,753,797	5,203,873

帝京大学薬学部 和 久 敬 蔵

第30回日本脂質生化学研究会は昨年6月30日、7月1日の2日間、神田一ツ橋の学士会館で開催された。今回は第30回を記念して外国人特別講演会を二題、前日の29日、午後3時から同会場で行った。最初はDr. F. Snyder (オークリッジ大)によるEnzymatic and Regulatory Controls in the Metabolism of Bioactive Phospholipidsの演題で、主に血小板活性化因子(PAF)の生合成について話をされ、特にPAF生合成の2つのルートの臓器又は細胞種による活性の差が興味深かった。

次にDr. R. W. Mahley (カリフォルニア大)によるAtherogenic Lipoproteins : Concepts Derived from Cellular and Molecular Biologyの演題で、動脈硬化の際のアポ蛋白及びそのGeneticsについて話され、多くの感銘を与えた。特にDr. Mahleyはまだ40代の半ばでアメリカの学者によくある非常に前向きで真摯な姿勢に好感を持った人が多かったと思われる。

研究会は参加者506名、一般演題92(一題18分)、シンポジウム31(一題20分)で、三会場に分れ、ほぼ例年と同じ規模であった。シンポジウムは第一日に血小板活性化因子に関して(16題)、第二日はリポ蛋白に関して(15題)であり、特にリポ蛋白シンポジウムに関しては高野達哉(帝京大・薬)教授にお世話頂いた。

総会と懇親会は同学士会館において第一日6時から行なわれ、懇親会は128名の参加を得てなごやかに行なわれた。

今回の印象としてICBL(国際脂質生化学会)が9月に東京で行なわれたせいか、一般講演数が例年よりやや少く、発表者も聞く方もややゆとりがあったように思われた。2つのシンポジウムはそれぞれ今はやりのテーマであることもあって参加者も多く会場はほぼ満員であった。

本会は研究集会でもあり、主催する方としては学会のきちきちしたふんいきを避けて、ややゆとりのある会をと、もくろんだつもりであったが、それが満たされていたかどうかこれは皆さんのご意見に待ちたい。又、ゆとりのある会を続けて行くことは現代の世相とは異なることなので、それに向ってのある程度の努力も必要と思われる。

島 崎 弘 幸

帝京大学医学部第一生化学

昨年9月26日から30日まで、日本油化学協会がホストとなって、ISF-JOCS世界油化学会議(The 19th World Congress of the International Society for Fat Research and the 27th Annual Meeting of the Japan Oil Chemists' Society)が東京(虎ノ門バストラル)で開催された。海外からの参加者230名を含む、世界34ヵ国から約700名が集まり、発表演題数も245題という大変充実した内容の国際学会であった。日程のうえではICBLに引き続いて開催されたこともあって、両方の学会に参加した人も多く見掛けた。

Opening Ceremonyは、26日の午前9時から開催され、琴の音が厳かに流れるなか、森 会長の開会宣言、早野実行委員長挨拶、また後援団体を代表して日本学術会議会長の近藤次郎氏から祝辞が述べられた。引き続きPlenary Lecturesでは、丸田芳郎氏(花王[株]社長)、J. Nieuwenhuis氏(ユニバー研究所長)、歌田勝弘氏(味の素[株]社長)、W. J. Wolf氏(アメリカ農務省研究センター)による講演が行われた。また、ISFは大会ごとに優れた研究者にカウフマン記念メダルを授与しており、本大会ではマレーシアバーム油研究所のA. S. T. Ong氏が選ばれ、その記念講演(翌27日)も行われた。

研究発表は、招待講演、口頭発表、ポスターの形式で行われ、その数は245題であった。招待講演者には、W. E. M. Lands (USA)、J. L. Beare-Rogers (Canada)、

E. N. Frankel (USA), R. G. Ackman (Canada), K. Larsson (Sweden), H. Baumann (FRG) など、著明な研究者が数多く含まれており、内外の参加者にハイレベルでの研究刺激を与える有意義な講演であった。

筆者は ISF-JOCS と ICBL の両国際会議に参加する機会があったので、それぞれの学会の性格について、その違いを簡単に述べるとすれば、前者は後者に比べ、運営や演者などに産業界からの参加が非常に多く、産学共同の国際会議として成功していたように思う。演題の領域もかなり広範囲にわたっていた。それは良いのだが、多数の会場に分かれているため、自分の聞きたい講演が同時に複数の会場で行われると言う弊害も感じた。また、参加者は欧米だけでなく、アジア-アフリカ諸国から大変多くの参加があって、この点には大変好感を持った。また、Technical tourとして、ライオン、ミヨシ油脂、東洋製油のそれぞれ千葉工場の見学会が組まれていた。当初バス二台、海外を中心に80名程の参加者を見込んでいたところ、参加希望者が多く急遽バスを追加し、更に何人かにはキャンセル待ちをお願いするほどであった。日本の産業界に対する海外の人々の関心の高さを伺わせた。

一方、ICBLは講演が1会場に制限されており、落ち着いて全ての講演を聞くことが出来た。この運営の方法は、ICBLが過去ずっと続けてきたものと聞いているが、それはそれでたいへん良いと感じた。取り上げたテーマも予めトピックスを絞り込んで募集されているため、そこで討論される内容は非常に高度なものであった。ただ、ネイティブスピーカーの招待講演者間でハイレベルの討論が続き、参加者が誰でも手を挙げて討論に加われる雰囲気

ではなかった気もする。

最も懇親会では打ち解けた楽しい雰囲気であった。赤松先生の司会もさることながら、Prof. Lands による "Lipidsの歌" の独唱が良かった。Lands 教授は ISF の懇親会にも参加されていたので、あの歌をもう一度ここで歌ってみてはどうかと薦めたが、ICBLでは、Prof. 野島を初め、沢山の知人が居るから歌ったのだということであった。もちろん、ISF の懇親会も良い雰囲気のものであり、Lands 教授を初め内外からの参加者に十分に楽しんで頂けたものと思う。

ISF, ICBL は共にヨーロッパを中心に組織されている国際学会であるが、それぞれの学会の性格や、基盤は若干異なっており、その両学会が我が国で相次いで、しかも初めて開催されたことは、我が国の脂質の研究史に一ページを加えるものであり、今後の発展にとっても大変有意義であったと思う。学会の開催、運営に御尽力下さった関係の諸先生方に感謝申し上げます。

第三回臨床研国際カンファレンス

東京都臨床医学総合研究所
生体膜研究部門室長 鈴木明身

The 3rd Rinshoken International Conferenceは昨年(1988年)9月26日から28日までの二日半に亘り、湯島の東京ガーデンパレスで山川民夫臨床研究所長を組織委員長として開催された。今回のテーマは、"Biomedical Significance of Glycolipids"であった。Rinshoken Conferenceは臨床研が創立10周年を迎えた1986年に、それを記念して毎年一回、異なるテーマで開催することを決めた国際カンファレンスである。第一回は"Platelet Activation",第二回は"Regulation of Cell Growth",のテーマで開催された。今回の第三回は上記のテーマで海外から23名の糖脂質研究者を招待して、次の6セッションに分けて行われた。Analytical Methods, Biological Functions, Cancer and Immunology, Metabolic Disorders, Neuronal Functions, Biosynthesis. この会の一週間前には、野島先生の主催された29回のICBLが開催されており、Rinshoken ConferenceはICBLのサテライトカンファレンスの性格もあった。残念ながら、開催当日の三日間天候が悪く、雨に降り込められることもあったが、それにもかかわらず、連日参加者は250名を超える盛況であった。参加して大いに会を盛り上げて下さった本会会員の皆様に主催者の一人としてお礼申し上げたい。

海外の研究者による23の口頭発表、日本人研究者による12の発表に加えて、40のポスター発表が行われた。個々の発表についての紹介は置くとして、この会を通じて感じた糖脂質研究の問題点と今後の課題について述べてみたい。

糖脂質についての今後の研究の基礎を作るのは、三次構造を含んだ糖脂質の構造解析であり、一次構造の特性に立脚した特異的な微量定量の確立であると思われる。膜に組み込まれた状態での糖脂質糖鎖の三次構造が問題にされなくてはならない。更に、この問題に関する研究は、今、多くの研究者の関心を集めている研究、糖脂質を認識する蛋白分子、細菌あるいは動物由来のレクチン、抗体、糖脂質によって機能が調節されるという細胞増殖因子のレセプターや未知の機能分子、等に関する糖脂質の認識部位の解析、機能発現の機序を明らかにする研究、と表裏一体の関係にある。微量定量法の確立は、タンパク質のアミノ酸配列の微量決定法が、分子生物学の進歩の一翼を担った様に、機能発現にいたる

糖脂質の動態の解析に欠かせない。糖脂質の存在を糖脂質研究者以外の多くの研究者に認識させた糖脂質分子の持つ生理活性に関する問題も、上記の問題の延長上にあるが、この場合には、さらに、in vivoでの活性発現に至る機序も問題にされなくてはならない。更に、機能を持つ糖脂質分子の発現の制御がどの様に行われているか、遺伝情報の解析、機能の場への移動の解析、等も問題になる。

従来より日本の糖脂質研究は欧米に比して、一歩もひけをとらず、大きな評価を得ていることは確かであるが、糖脂質の構造解析に偏りがちな我々の研究、かと言って、構造のように確かな手ごたえの得られにくい生の、動きのある現象を研究の対象にする不安。しかし、我々日本の研究者が、この不安の中に果敢に踏み込んで、得意の構造に基盤を持つ武器を使って、多くの難問を解決することは出来ないのだろうか。私自身を含めて、日本の糖脂質研究にたずさわる研究者の持つ独創性が今問われている。

こんな感想を持った会であった。糖脂質に関する研究を行っている世界の研究者間の関係は頗る良好で、この様な会では、友情質問を含めて、実に活発な討論が繰り広げられる。残念ながらRinshoken Conferenceでは十分な討論の時間が取れなかった。いつか、十分な時間を取って、お互いに考えていることを言い合う会が持てたらと、思う。しかし、招待講演者たちと同じ東京ガーデンパレスホテルに泊った関係で、内のバーなどで夜遅くまで話し合うことが出来たことはプラスであった。言葉のハンディの克服、問題意識の鋭化、仕事の成果、そんな機会が実現するまでに、難問がたくさんある。

第2回植物脂質シンポジウムの報告

東京大学理学部 佐藤直樹

本年1月9日-10日の2日間にわたり岡崎の基礎生物学研究所において川口昭彦(東大)・村田紀夫(基生研)両氏のお世話により標記の集まりが開かれた。これは同研究所の研究会の一つとして企画されたものであるが、前年1月に岡山大学で開催された植物脂質シンポジウムを引き継いだ会合である。日本で植物の脂質を研究している研究者の数はまだ多いとはいえないが、それでも30余名の参加者により活発な討論が予定時間をやや超えて続けられた。15題の一般講演に加えて、ゲストとしてお招きした井上圭三氏(東大・薬)による「動物細胞リン脂質代謝におけるホスホリパーゼA₁、A₂の役割」と赤松稔氏(予研)による「高等動物細胞におけるホスファチジルセリン生合成の調節機構」の講演が行なわれた。

一般の講演は多岐にわたっているが、あえてグループ分けをするならば、脂質生合成の分子生物学(5題)、環境による脂質の変化(5題)、藻類・微生物の脂質代謝(2題)、植物組織の分化に伴う脂質の変化(3題)となる。植物脂質の研究では、その主流ともいえる葉における脂質生合成の経路に関する代数的な研究が一段落し、酵素の生化学的・分子生物学的研究へと向かい始めていることがうかがえる。この点では、渋谷勲氏(埼玉大・理)による大腸菌・酵母におけるCLの生合成に参与する酵素の遺伝子の研究と山下哲氏(群馬大・医)による酵母のPI生合成系の遺伝子の研究が、我々狭い意味での植物を扱うものにとっての手本になることは幸いである。植物の側からは、ラン藻の不飽和化の突然変異体の単離について和田元氏・村田紀夫氏(基生研)から、アシルトランスフェラーゼのクローニングについて同じグループの石崎治氏から、また筆者からはラン藻の低温誘導性遺伝子のクローニングについて、それぞれ発表があった。

生育環境との関連では、温度・塩ストレス・CO₂濃度・オゾンなどがとりあげられていて、応用面ばかりでなく基礎的な脂質代謝の面でも知見が得られている。吉田静夫氏(北大・低温研)からは低温感受性に関連した液胞膜の相転移について、平山修氏(島根大・農)からは耐塩性に関連したプロトンポンプの脂質要求性につい

て、佐藤典裕氏・川口昭彦氏(東大・教養)からはクロレラの脂質分子組成に対するCO₂濃度の影響について、松尾友明氏(鹿児島大・農)からは低温感受性に関連して18:0ACPデサチュラーゼの精製について、柳剛氏(公害研)からはオゾンによる葉緑体脂質代謝の変動について、それぞれ話題の提供があった。

荒尾友人氏・山田晃弘氏(東大・教養)からはケイ藻の20:5の生合成について、奥山英登志氏(北大・理)からは*Pseudomonas*の16:1(9トランス)の生合成について、発表があった。

植物組織の分化に関連しては、関谷次郎氏(岡山大・農)から花粉のリン脂質分子種について、市原謙一氏(京都府立大・薬)から空熱種子のPAホスファターゼの基質特異性について、参田幹郎氏(岡山大・農)からはミカン果実のキサントフィルエステルについて、それぞれ話題が提供された。

植物脂質の分野では、基礎的な視点ばかりでなく、未開拓地にも、また温度などの環境条件への応答という観点からも、不飽和脂肪酸を含む脂質分子種の生合成が注目されており、この点に関連した論文が著者数に達することにも表れている。このテーマは、昨年夏にブダペストで開催された国際植物脂質シンポジウムの主催者である加藤が異口同音にその重要性を強調していただけた。これから一層競争が激しくなるものと思われる。日本の研究者の数に於いて多くはないが、このような小規模で密度の高い研究集会を通じて独自の研究者層を育てていくことが期待される。

さいごに、偶然とはいえ自費の折りも折、この研究会を企画しその運営にあたられた、脂質生化学研究会会員でもある、オーガナイザーのお二人の先生方には格別のご苦勞もありがとうございました。この場を借りてお礼を申し述べて拙稿の終わりにします。

1. 学会の概要、規模及び参加者

去る昭和63年9月19日より22日まで、東京千代田区九段の日本大学会館にて上記の国際学会が開催されました。国際脂質生化学会議は毎年、この分野の第一人者を集めて、最新の情報を基に熱心な議論が行なわれ、既に29回を迎えましたが、欧州以外で開かれたのは今回が最初であります。参加者は諸外国より69名(内訳、アメリカ、フランス、イギリス、ノルウェー、デンマーク、ソ連、ベルギー、カナダ等18カ国)また国内より、約203人が参加しました。

2. 学会の討議内容

今回の学会は次の三点を主要なテーマとして行なわれました。

(1) ホスホリパーゼの生理的意義

ホスホリビド(リン脂質)は生体膜を構成する重要な成分であります。この脂質には様々な種類の脂肪酸がエステル結合しており、これに作用して脂肪酸を遊離するのが、ホスホリパーゼであります。この際遊離した脂肪酸のうちアラキドン酸はプロスタグランジンやロイコトリエン等の生理活性物質になるため、この酵素については多くの研究がなされてきました。今回はホスホリパーゼの精製はもとより、ホスホリパーゼの蛋白質としての諸性質の報告とともに、酵素阻害剤の抗炎症作用について多くの話題が提供されました。例えば、分子量35KDaのリボコルチンは酵素に結合して阻害するのではなく、リン脂質やカルシウムイオンに結合することにより作用を発揮することが解明された事は注目に値します。また炎症に際して補体の特定のフラグメントが産生され、ある種のホスホリパーゼを強く阻害することが、東大薬学部の研究グループより報告され興味を引きました。

(2) 膜脂質の生合成

最近、細胞膜を構成する脂質の生合成のメカニズムが、関連する酵素の単離と、その遺伝子構造の解析を通じて急速に明かにされつつあります。今回、これらの最新の研究成果が報告されるとともに、細胞内の各オルガネラで合成されたリン脂質やコレステロールが、細胞膜や、他のオルガネラに運搬されるメカニズムが発表され、活発に討論されました。

(3) 脂質の栄養学的評価

脂質の中でも各種の不飽和脂肪酸が、高血圧、冠動脈疾患、さらに神経機能などにどの様に影響を与えるかが、大きな話題となっております。中でも、主として魚の油に含まれるEPA(エイコサペンタエン酸)の抗血栓作用が強調され、また植物油の代表的脂肪酸として、摂取が奨められているリノール酸も過多になると障害があり、むしろシソ油に多く含まれるα-リノレン酸の健康増進作用が発表されました。この脂肪酸を多く食べさせたラットでは寿命が延びるとともに、学習能力が向上するという報告がありました。これらは今後ヒト等の高等動物での効果がどのようなものであるか注目されております。さらにサバなどの魚にEPAを大量に合成する細菌が存在することが報告され、大量生産へと道が開かれたものとして脚光を浴びております。

3. 学会の成果及び波及効果

今回の学会は、2で述べたような多くの学問的成果が発表されて当事者同士の交流を通して相互理解の効果があがっただけではなく、先に述べたように欧州以外で開催された最初の学会であること、また第29回目にして初めてソ連等の共産圏諸国よりの参加者があったことなど、真の意味の国際学会として大きな成功を納める事ができました。

討論が非常に活発であったことと、国内外のこの分野の第一人者がほとんど参加していたこと等を考えると、今後この分野の研究がますます盛んになるとともに、また学会参加者相互の共同研究などにも発展していくものと期待されます。なお、第30回大会は本年イタリアで開催されることが発表されました。当日配られたパンフレットのコピーをご覧の上、多数の参加が期待されております。

Distribution of First Circular : 3,400

Foreign countries : 1,200

Domestic : 2,200

Registration : 272 (19 countries including Japan)

Abroad : 69 (25 %)

Domestic : 203 (75 %)

Submission of papers : 132

Abroad : 55 (42 %)

Domestic : 77 (58 %)

Plenary lectures : 3 (van Deenen,
Bergelson, Yamakawa)

Invited lectures : 19

(Abroad: 12, Domestic : 7)

Communications : 18

(Abroad : 12, Domestic 6)

Posters : 92

(Abroad : 28, Domestic : 64)

Geographical distribution

	Participants	Submissions
Austria	1	1
Belgium	3	3
Canada	3	3
Denmark	1	1
F.R.G.	7	6
Finland	1	1
France	11	10
Hungary	1	1
India	1	1
Israel	2	0
Italy	7	6
Japan	203	77
Nigeria	1	1
Norway	4	3
Switzerland	1	0
The Netherlands	2	2
U.K.	3	1
U.S.A.	16	11
U.S.S.R.	4	4
Total	272	132



30th INTERNATIONAL CONFERENCE OF THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

Stresa (Lake Maggiore), Italy

September 26-29, 1989

Scientific Program:

The topics of the Conference will be:

1. Metabolic pathways from mevalonate
2. Molecular biology of apolipoproteins
3. Aberrances of lipid metabolism

Preliminary list of Invited Speakers:

G. ASSMAN	(F.R.G.)
F. BARALLE	(Italy)
B. BREWER	(U.S.A.)
S. DI DONATO	(Italy)
H. RUDNEY	(U.S.A.)
K. SANDHOFF	(F.R.G.)
M. SINENSKY	(U.S.A.)
C.R. SIRTORI	(Italy)
K. SUZUKI	(U.S.A.)
J. TAGER	(The Netherlands)
G. VAN DESSIL	(Belgium)

Organizing Secretariat:

B. ROLANDER CHILÒ
Nutrition Foundation of Italy
Via San Pietro all'Orto 17, 20121 Milan
Phone: 02 - 709514 / 706271
Telefax: 02 - 709514

Organizing Committee:

B. BERRA
A. CATAPANO
G. GALLI
M. GALLI KLENLE
R. PAOLETTI
C.R. SIRTORI
G. TETTAMANTI

FAOB 5



Seoul,
August 13-18, 1989



Organized by the
Biochemical Society of
the Republic of Korea

Details From:
Secretariat
The 5th FAOB Congress
The Biochemical Society of
the Republic of Korea
P. O. Box 226 Mapo
Seoul 121, The Republic of Korea

Telephone : (001-82-2) 715-5939
Telex : K23231 Ext. 5951
FAX : 757-9115 Ext. F150

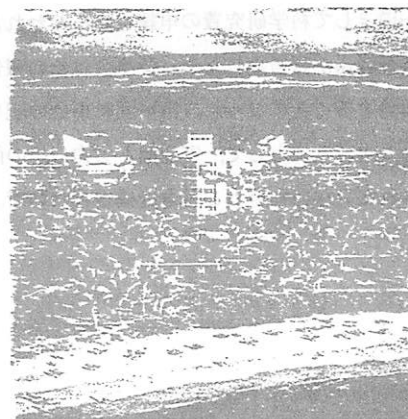


15th International Congress
of Biochemistry

JERUSALEM, ISRAEL 4-9 AUGUST, 1991

THIRD INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON LIPOFUSCIN AND CEROID PIGMENTS — 1989: STATE OF THE ART

AUGUST 20-23, 1989



Stouffer Wailea Beach Resort

Wailea, Maui, Hawaii
USA

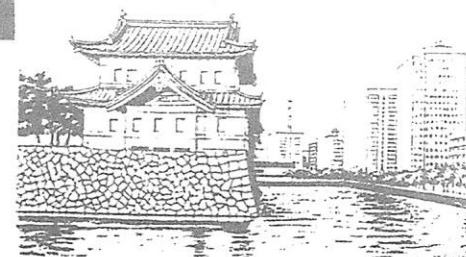
Organized by:
Eduardo A. Porta, MD
Department of Pathology
John A. Burns School of Medicine
University of Hawaii



Third International Conference on Platelet-Activating Factor and Structurally Related Alkyl Ether Lipids

May 9-12, 1989
Tokyo, Japan

Japan Travel Bureau, Inc. (JTB)
Foreign Tourist Division
Convention Center (CD05-7101-89)
1-13-1 Nihonbashi, Chuo-ku,
Tokyo 103, JAPAN



脂質データベースに関する資料

日本脂質生化学研究会の事業として、脂質データベースを作っては如何かという提案が、林（近畿大・理）幹事から昨年の第一回幹事会に提案され、小委員を設けてその可能性を調査することが了承された。それに基づいて林幹事を中心に主として作成資金獲得の可能性の調査が進められ、その一環として科学研究費の申請もおこなわれた。

そして昨年の第二回幹事会に調査経過が報告されたが、幹事会はその報告を直ちに了承はせず、次回の幹事会で更に議論することになった（第一回幹事会の記事、第二回幹事会議事録参照）。幹事会での議論の内容は主として、資金面と労力分担の面とであり、企図されている内容に関して周知されていないということも指摘されたので、ここに一般会員の資料として再録する。

（植田幹事）

脂質情報データベースの作成について

日本脂質生化学研究会

脂質情報データベース小委員会

最近コンピュータの発達に伴い、各種の情報についてのデータベースが作成され、社会一般に利用され始めました。将来はコンピュータを利用した情報ネットワークを通じてデータベースの利用がより一般化するのに伴い、各種のデータベースの拡充が叫ばれています。生命科学の分野においても例外ではなく、データベースを利用することにより、既存の情報を迅速に、かつ、正確に得ることが出来るので、各国とも独自に、或は、各国が協力して、データベースを充実しつつあります。

わが国においても各官庁により各種のデータベースが作成されており、サイエンスの分野では、科学技術庁の傘下にある特殊法人日本科学技術情報センター（JICS T）および文部省の学術情報センターにおいて各種のデータベースが作成されています。

現在最も急速に進歩し、また同時に日本でもその発展が急務とされている生命科学の分野において、その基礎となるべき生化学においては、既にタンパク質および核酸については米国、ヨーロッパおよび日本の三者の国際協力によりそのデータベースが着々と整備されています。わが国では、蛋白質については農林生物研や東京理科大が中心に、また核酸については国立遺伝研が中心となってデータベースの作成が進められており、日本、米国および欧州の3つのデータベース間の国際通信回線による共同利用が始まっています。国内においては前述の日本科学技術情報センターおよび学術情報センターを通してそのデータが、大学や企業の研究者に利用されています。

一方、複合糖質の糖鎖についての国際的なデータベース作成プロジェクトが、米国Georgia大学のAlbersheim教授を中心に進められ、最近、糖脂質糖鎖のデータ入力に関して日本脂質生化学研究会に協力依頼があり、現在帝京大学においてデータの入力が始められています。この様に生化学の分野においても、データベースを作成し、研究の進展をはかることは世界的な流れとなりつつあります。

しかし、蛋白質、核酸あるいは糖質についてのデータベースが国際的な規模で作成、利用されつつあるのに比べ、脂質に関するデータベースについては未だ作成しようという状況に至っていないのが現状です。そこで上述の生命科学の分野にとって重要な3つの物質に加えて、細胞にとって最も基本的な構成成分である脂質についてのデータベースを早急に作成することが強く望まれます。

特に脂質の中でも、リン脂質や糖脂質の分野においては歴史的にもわが国の化学者の寄与が大きく、世界的にも認められているところです。最近特に癌研究や老化の研究分野において糖脂質やリン脂質の生理活性が注目されています。しかし一部の脂質について、部分的な物理学的性質についてのデータベースは既に作製されているものの、脂質全般についての構造と物理学的性質および生理活性との関連性、分布、分

析方法等を有機的に結び付けたデータベースは未だ作製されておりません。この様な有機的に利用可能な脂質情報データベースが作製されるならば、発ガンのメカニズムや正常細胞膜の持つ種々の機能の解明、老化現象や痴呆症の解析、さらにはこれらの疾患の治療薬の開発に大きな成果が期待されます。

また、上述の3つのデータベースについては、いずれも外国の研究機関や学会が中心となり、日本がそのデータベースの作成に協力するという形で作成され、完成されたデータベースそのものは外国の財産となり、日本はそのデータベースの利用者となっているに過ぎません。先進国の中で日本だけが各種の情報を一方的に利用するだけで、逆に日本からの情報提供が非常に少ないという批判のある現状に鑑み、世界に先駆けて脂質のデータベースを作製し、全世界にその情報を提供することは日本の国際的地位を高めることにもなり、かつ、脂質を研究する国内外の学者にとって益するところが大であると確信致します。

脂質情報データベースの作製に関して、昨年末より、関連学会、日本科学情報センター、日本科学情報協会、文部省などに脂質データベースの作製を働きかけて参りました。日本脂質生化学研究会（会員1000名）では、この6月の幹事会において脂質情報データベースの作製についての承認を得、データベース作製のための小委員会を設置するに至りました。また日本生化学会（会員1万人）においてもデータベースの作製を支援することが8月の幹事会で決定され、今秋には、データベース作製のため準備費用として、文部省の科学研究費の申請を予定しております。

この様に脂質データベースの作製については、データの提供およびその作製体勢が着々と整いつつあります。しかし、現在まで蓄積された脂質に関するデータの量から考えると、データベースの作製とその維持には多額の経費と時間および人員を要し、政府機関またはこれに準ずる機関のサポートなしには達成できません。現状では、データベースの資料の収集、整理、運営について多年の経験とノウハウおよび予算を持っている日本科学技術情報センターを通してデータベースを作製することが最適であると考えられます。しかし日本科学技術情報センター自体は科学技術庁の指導の下に運営されており、民営移管の話がある中、独自に業務を拡大することは困難な状況にあります。

よって脂質データベースの作製の意義と急務なことをご理解頂き、本データベース作製に対する政府機関のサポート関しまして特別のご配慮を頂きたいこの段お願い申し上げます。

データベース名： 脂質情報データベース^(仮称)

L I S (Lipid Information Service)

目的： 現在最も急速に進歩し、また同時に日本でもその発展が急務とされている生命科学の分野の中で、蛋白質、核酸あるいは糖質についてのデータベースが国際的な規模で作成、利用されつつあるのに比べ、脂質に関するデータベースについては未だ作成しようという状況に至っていないのが現状です。しかし、特に脂質の中でも、リン脂質や糖脂質の分野においては歴史的にもわが国の化学者の寄与が大きく、世界的にも認められているところです。最近特に癌研究や老化の研究分野において糖脂質やリン脂質の生理活性が注目されております。しかし一部の脂質について、部分的な物理学的性質についてのデータベースは既に作製されているものの、脂質全般についての構造と物理学的性質および生理活性との関連性、分布、分析方法等を有機的に結び付けたデータベースは未だ作製されておりません。この様な有機的に利用可能な脂質情報データベースが作製されるならば、発ガンのメカニズムや正常細胞の持つ種々の機能の解明、老化現象や痴呆症の解析、さらにはこれらの疾患の治療薬の開発に大きな成果が期待されます。

概要： 既存のデータベースにはない、化学構造、生物活性、物理学的性質、分布、および分取、分析法を有機的に結び付けた、脂質に関する全ての情報を網羅したデータベースの作製

データの内容：(1) 各脂質について、その属性、名称、化学構造、分子式、分子量、各種の物理化学的性質（融点、沸点、屈折率、溶解性、紫外スペクトル、赤外スペクトル、ESP、NMR、MSなど）、生物活性、分布、確認方法および文献など

(2) 各脂質の定性、定量法（吸光光度分析、TLCなど）および分取方法（カラムクロマトグラフィー、HPLCなど）など

(3) 臓器、組織および培養細胞の脂質組成

利用方法：(1) 各脂質は、その属性、名称、構造、生物活性、動植物名および臓器、組織あるいは培養細胞名などから目的とする脂質を検索することが出来る。

【例】「NZBマウスの赤血球の脂質組成は？」

「Fucをその構成成分として含む脂質は？」

(2) ある脂質を分析する場合に、その脂質についての分離・精製方法、

定性・定量方法、TLC、GC、MS、NMR などのデータを検索することが出来る。

【例】「培養細胞の磷脂質を分析したいが、その条件は？」

「血液中のリボ蛋白のHPLCでの分析方法は？」

- (3) 脂質の構造と生理活性の関係を容易に知ることができ、新しい生理活性をもつ脂質の合成や、新薬の開発が容易にできる。

- 利 用 者： (1) 産学官の脂質研究に携わるすべての研究者および技術者
(2) 医薬品の開発部門、検査薬、診断薬開発部門の研究者および技術者
(3) 農学、細菌学、発酵工学の分野の研究者および技術者
(4) 国外の脂質研究に携わるすべての研究者

日本脂質生化学研究会会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学研究会 (Japanese Conference on Biochemistry of Lipids, JCB L) と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展、向上を図り、あわせ研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。

- (1) 研究討論会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者
- (3) 名誉会員をおくことができる。名誉会員は幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員

本会は、その運営のために次の役員をおく。

- (1) 会長1名、庶務幹事1名、会計監査1名、幹事若干名をおく。
- (2) 会長、庶務幹事、幹事は幹事会を構成し会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (3) 会長、庶務幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長は幹事会に出席して意見を述べることができる。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。
決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するため、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、1月1日より翌年12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は会計監査によって、監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

附 則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。
- (3) 本会の事務局は、帝京大学医学部生化学教室に置く。

(〒173) 東京都板橋区加賀2-11-1

「誰がやるんですか、誰かが、そんなことしたら研究者が何人か犠牲になりますよ!」

12月12日の幹事会の席上で、小生が、脂質データベースの作成に向けて、来年度(昭和64年=平成元年度)も調査をつづけたい旨発言した時の、ある幹事の言である。小生はこの瞬間、もう事務局を預ることをやめようと決心した。「誰がやるんですか、誰かが、事務局などやったら、研究者が何人か犠牲になりますよ!」

それでも犠牲者が出ないように、ずい分注意したつもりである。できる限りのことは自分で処理したものの、それでも教室員にはずい分、時間をつかわせてしまっている。「モシモシ、講演集が送られて来ないんですけど」。こちらの仕事を中断して、フロッピーの中を探す、名簿を探す、名前が出て来ない。「会員の方ですか?」「いいえ、でも今度発表するんですけど」「?」。電話というのは曲者である。こちらの仕事の手順にかゝりなくとびこんでくる。まあいいさ、斯学振興に少しは役に立っているんだろう。

年2回、サーキュラーと講演集の袋詰めと発送の作業がある。講演集は全体で7~800kgにもなる。半口がかりで郵便局に運び込む。このムスケルアルバイトはさておいて、その制作はやはり相当に心的エネルギーを必要とする。

本当は手落なく慎重な企画のもとに編集というのは行われるものであろうが「サーキュラーなど誰も読みやしないんだから」という幹事がいれば、何となく人に原稿を頼むのも気が重く、手前の原稿だけでコトをすまし、益々独善的になる。まあ読まれなくなつて仕方ないか!

そんな事務局も12年もやれば、それなりの奉仕をしたことになるであろう。ところで、どうせ事務局をやるのなら、何か残ることをして終りにしようとも思った。それが、今回の脂質データベースの作成である。しかし、事務局も長いことやったのだから、多少、やりたいことをやらせてやろうという程には世間は甘くはなかった。なる程事務局が独断で事を企てたり、予算を動かすことは許し難いことである。誰も事務局にそんな権限をゆだねていないわけではない。幹事会なり総会の制約を受けるのは当然である。

とはいっても小生も年をとり過ぎた。今更、鼻たれ小僧の走り使いに戻れるわけでもない。だから、小生の庶務幹事は今年限りである。

そこであとのことに関する具体的提案である。(1)犠牲になって働ける庶務幹事を会員の中から探すことである。そして、庶務幹事を上手に動かすことのできる幹事会なり、何なりを再編成することである。しかし、そのような走り使いに徹することの出来る事務局を探せなければ、(2)お金で事務局を雇うことである。日本学会事務センターに見積りを求めた所、会員業務費、会計業務費、庶務業務費を併せて約165万円である(現在の事務局はそれを20万円ですしている)。現在の会員の会費を2,000円値上げして、年額5,000円にすればまかなえる。うまくゆけば4,500円ですむかもしれない。しかしそれとて、会報や講演集の編集製作をする会議を招集し、事務センターに命令をするシステムが必要であり、その費用は従来どおり、あるいは会議を多く開催すればそれ以上必要になるかもしれない。

この様な文章が、どこの校閲も受けずにサーキュラーに会員の費用を使って掲載されること自体が、事務局の(というより庶務幹事植田伸夫の)独断と独走を如実に現わしているのであるから、何とかしなければいけない事態に立ち至っていることは確かである。

どうせ読まれはしないサーキュラーの、しかも読まれはしない編集後記ではあるけれども、会員、一人一人が会員の責任を自覚して、自分の意見を作って頂きたいところである。

植田 伸 夫

第31回日本脂質生化学研究集会

宿泊観光のご案内(平成元年7月21日(金)～23日(日))

謹啓 立春の候 皆様には益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。

この度、第31回日本脂質生化学研究集会が兵庫県明石市神戸学院大学において開催される運びとなり、研究集会にご参加の皆様方の宿泊観光のお世話を弊社にてさせていただき、諸準備を進めております。

私ども一同総力を挙げてこれに取組み、万全の準備をもって集会が成功し無事終了します様ご協力をお願い申し上げます。

皆様方のご参加を心からお待ち申し上げます。

株式会社 日本旅行姫路駅旅行センター

支店長 藤 木 繁 治

1. 宿泊のご案内

(1) 取扱期間 平成元年7月21日(金)～7月23日(日)

但し上記日程前後についてもご希望があれば同一条件にて手配させていただきます。

(2) ホテル名及び指泊料金(1泊朝食付税金サービス料込み 定員利用1人当り料金)

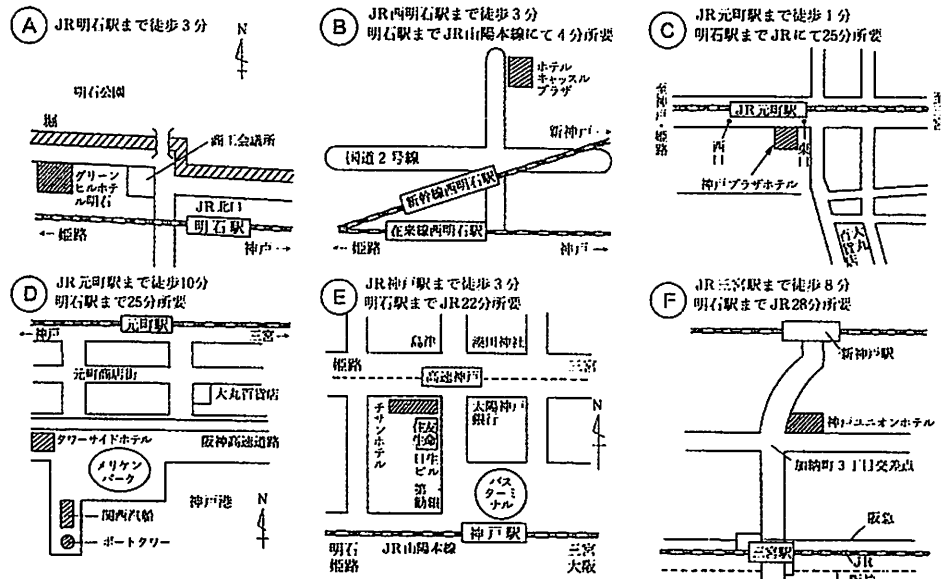
	ホ テ ル 名	住 所(電話番号)	料 金(ツイン・シングル)	案 内
A	グリーンヒルホテル西明石	明石市大明町2-1-1 078-912-0111	ツイン ￥7,700 シングル ￥7,700	次頁地図参照
B	ホテルキャスルプラザ	明石市松の内2-2 078-927-1111	ツイン ￥6,700 シングル ￥6,700	"
C	神戸プラザホテル	神戸市中央区明通1-13-12 078-332-1141	ツイン ￥7,200 シングル ￥7,200	"
D	神戸タワーサイドホテル	神戸市中央区波止場6-1 078-351-2151	ツイン ￥5,500 シングル ￥5,300	"
E	チサンホテル神戸	神戸市中央区中町通り2-3-1 078-341-8111	ツイン ￥7,500 シングル ￥7,200	"
F	神戸ユニオンホテル	神戸市中央区布引町2-1-9 078-222-6500	ツイン ￥7,500 シングル ￥6,800	"
G	人 丸 花 壇	明石市大蔵天神町21-22 078-912-1717	1泊朝食 ￥7,000 (1人定員4人使用で1人料金)	JR明石駅から東へ徒歩5分
H	明 石 屋 別 館	明石市松の内2-8-7 078-927-4141	1泊朝食 ￥5,500 ツインのお部屋あります	JR西明石駅から徒歩3分 JR新幹線 " 徒歩4分
I	西 明 石 ホ テ ル	明石市和坂12-7 078-928-0246	1泊のみ ￥5,500 (朝食現金払い600)	JR西明石駅から徒歩2分 (東口)
J	ホテルニューカハマ	明石市野々上3-13-3 078-927-5115	1泊のみシングル ￥5,200 (朝食現金払い600)	JR西明石駅徒歩4分
K	舞 子 ビ ラ	神戸市東灘区東灘町18-11 078-706-3711	1泊のみ ￥5,000 食事は別途払い	JR舞子駅から東へ徒歩10分

※ K(舞子ビラ)は7月21日の宿泊のみ予約になります。7月22日～以降他の団体で予約できません。

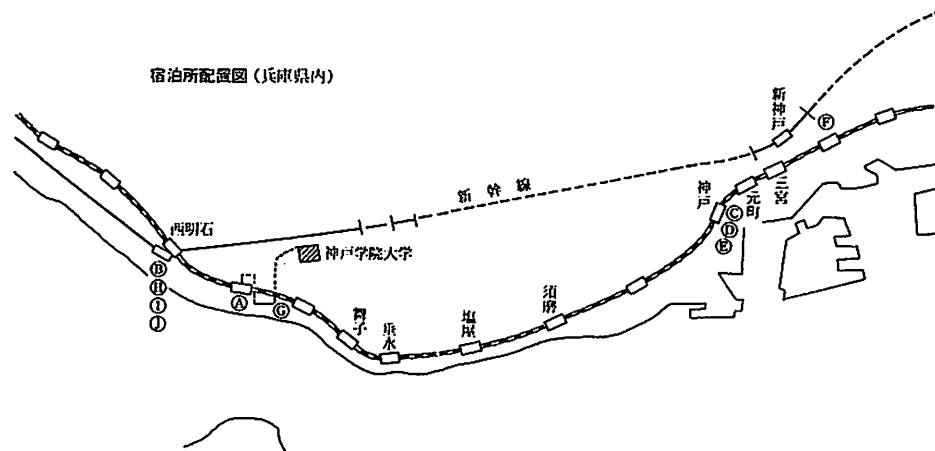
(3) 取 消 料

宿泊日の14日前までにお取消の場合	無 料
宿泊日の14日以後4日前までにお取消の場合	1,000円
宿泊日の3日前以後前日までにお取消の場合	3,000円
宿泊日当日及び不泊の場合	宿泊料金額

(4) ホテル案内



宿泊所配置図(兵庫県内)



- ※ 各ホテル共部屋数に限りがありますのでお申込みの際は、必ず第2、第3希望をご記入下さい。
- ※ 会場へは各ホテルからJR最寄駅へお越しになり、各線ご利用の上明石駅へ。明石駅北口から神姫バス(神戸学院大学行)にて約5分毎、所要15分、運賃200円で運行しております。
- ※ 新幹線にて西明石駅へお越しの方は山陽本線西明石駅(のりかえ時間7分)から明石駅まで4分かかります。

② 航空便のご案内

- (1) 航空便で最寄りの空港から大阪空港への航空便をご利用の方で5日以内に往復される方には往復割引航空券がありますので、別紙申込用紙にご記入の上お申込み下さい。
- (2) 航空券の取消払戻し料………大人片道運賃額によって搭乗日の3日前から便出発時刻までに取消した場合500～4,000円の範囲で取消料が必要です。

③ 観光のご案内

- (1) 日 時 7月24日(月) 8:00～15:00
費 用 ￥6,000(昼食・入場料をふくむ)
- (2) 行 程

神戸地区ホテル	明石地区ホテル	日本玩具博物館	姫路城(昼食)
8:00	9:00	10:00～11:00	11:30～14:30
姫路駅			
15:00			

上記コースのお申込みが25名に満たない場合は催行を中止することがあります。

④ お申込み方法・手続のご案内

- (1) お申込み方法………別紙申込書にご記入の上、下記へご送付下さい。
- (2) 送 付 先………〒670 兵庫県姫路市駅前御殿前188-1
(株)日本旅行姫路駅前旅行センター内
「日本脂質生化学」係(担当 岡田、太田)
TEL 0792-81-1067
- (3) お申込み締切日………平成元年6月20日(必着)
- (4) 費用のお支払について………お申しいただいた宿泊、航空、観光の代金全額を7月10日までに下記口座へお振込み下さい。
〒第一勧業銀行姫路支店
普通口座 1000892
日本旅行姫路駅前旅行センター
- (5) 通信費として1件¥300を申し受けますのでご了承下さい。

第31回日本脂質生化学研究集会

宿泊，観光，航空お申込書

代表者氏名		住所（予約確認書送付先）〒							電話番号	
		〒								
氏名	性別	年齢	宿 泊						観光	その他の 相部屋の 可否
			希望ホテル 第1・第2・第3	ツ イン	シン グル	7/21	7/22	7/23		
◎日 旅 太 郎	男	28	F・B・D		○	○	○	○	なし	相 可 否
			・							
			・							
			・							
			・							
			・							
			・							
航 空	搭乗日	◎ 7月21日 7月23日								
	区 間	鹿児島 → 大阪 大阪 → 鹿児島								
	人 員	7:00頃 17:00頃								
	搭乗者名	1名 ニチリョウタロウ								

※ 宿泊につきましてはホテル希望が最優先か部屋タイプが最優先かを余白欄に記入して下さい。

※ 各ホテル共部屋数に限りがありますので第3希望までご記入下さい。

参考 健保組合 公務員共済組合施設 お申込みは直接施設へご連絡下さい。

- 屏風ヶ浦荘…………… 明石市藤江字今崎 1595 078-922-3005
- 六 甲 荘…………… 神戸市中央区北野町1-1-14 078-241-2451
- 布 引 荘…………… 神戸市中央区熊内町9-2-13 078-221-0371
- 神戸海員会館…………… 神戸市中央区相生町1-3-5 078-351-0641